日本女性会議2025in橿原　体験記

＜共同制作＞発行：令和７年12月

インタビュアー：ＮＰＯ法人えべつ協働ねっとわーく　干野 里佳
インタビュイー（語り手）：派遣研修員　堀井　杏珠
編集：江別市生活環境部市民生活課（市民協働担当）

～はじめに～　「日本女性会議」って？

男女共同参画社会の実現に向けた課題の解決策を探るとともに、全国各地の相互交流の促進や、情報のネットワーク化を図ることを目的に1984以降開催されている全国規模の会議で、2025年は奈良県橿原市で開催されました。次回の開催は、2027年で香川県丸亀市で開催される予定です。

江別市は本年、全国から約2,000人が参加する熱意と活気にあふれた本会議に参加いただき、その概要や知見を広く周知することにより市内における男女共同参画への理解促進を図ることを目的に派遣研修員の募集を6月に行いました。その結果、5名の応募者が！

研修員に決定したのは、北海道情報大学の堀井杏珠さんです。堀井さんは、日本女性会議への参加を通して学んだことを「Ｂｒｉｃｋ Ｒａｄｉｏ」や江別市男女共同参画推進連絡協議会が主催するイベント「さんかくまつり」で発表してくれました。

本会議への派遣にあたって、サポーターを務めてくれたのは NPO 法人えべつ協働ねっとわーく干野里佳さん。

干野サポーターが、堀井さんにインタビューをした模様を体験記としてお届けします！

【応募時の心境】

Q：日本女性会議への参加は大学の掲示板で見て応募したと聞きました。応募しようと思った動機を教えてもらえますか？

A. 普段、男性が多い環境です。その中で違和感を覚えても、周りに相談できる雰囲気がないのがずっと課題に感じていました。だからこそ、女性の活躍について前に出ている方々の話を聞ける機会があるなら行ってみたいと思いました。

家でも「女の子なのだから〇〇しなさい」と言われることがあって、「その指摘は性別に関係ないのでは？」と感じる場面がありました。他の人はそういう違和感をどう受け止めているのかが気になり、たくさんの人の話を聞いてみたいと思ったからです。

Q：募集要項を見たとき、特に興味を引かれたのはどこでしたか？

A.「多様性」という点です。LGBTQ当事者の話を直接聞けるのかなと思いましたし、男女のギャップをどれだけの人が感じているのか、データとして可視化されたものを見られる事も魅力でした。自分で調べることも出来ますが、専門的な知見をベースにした話を直接聞けるのは貴重な機会だと思いました。

Q：研修への派遣が決まったときはどの様な気持ちでしたか？

A. 面談のとき、質問が多くてとても緊張しました。でも、自分がどうしていきたいのかをはっきりさせる良い機会になりました。決まったときは「本当に自分でいいのか」という気持ちでした。

応募者が 5 人もいる中での選考の機会は滅多に無かったですし、「学生の意見を聞きたい」と選んでもらえたことに使命感を感じました。

ブレイクタイム

堀井研修員はどう感じた？

「日本女性会議」という名称

少し「壁」を感じる名前だと思いました。もともとは女性の立場が弱かった時代に「女性が課題解決に動いている」ということを示す上で有効な名前だったのだと思いますが、今は男女共同参画のための会議でもあるので、名前からもその点が伝わるといいなと思います。

【日本女性会議への参加を経て】

『子どもの「自分らしさ」と「生きにくさ」をめぐって』
ピックアップ!!
「中学生から増える不登校について」

Q：どのような話が印象に残りましたか？

A. 不登校のプロセスとして、心理的な不安から母子関係の密着化と孤立が生じるという指摘が特に印象的でした。この課題に対し、単に子どもを指導するのではなく、保護者自身をケアすることで家庭の安心感を回復させる必要があるという、周囲の大人の関わり方の重要性を深く理解できました。

<堀井研修員が描く将来の展望>
　奈良では「学びの多様化教室」というものがあって、不登校の生徒を学校に戻すのではなく、別の形で単位認定し卒業資格を取得出来る場があるそうです。北海道にはまだ札幌にしか設置されていないので、この様な場所が増えたらいいと思いました。

Q:保護者への支援についても具体的に話がありましたか？

A. はい。不登校の子どもだけでなく、親へのケアも重要という話がありました。

<堀井研修員が感じた課題>
　子どもが不登校になると親も気に病んでしまうケースがあるので、保護者へのサポート体制も重要だと感じました。「どういう場でケアを行うべきか」は難しい問題ですが、その様な支えがあれば親も子どもも生きやすくなると思います。

「子どもたちを被害者にも加害者にも傍観者にもさせないために」
ピックアップ!!
「性の多様性に関する教育」、「包括的性教育」

Q：この分科会では、LGBTQ の当事者の話を聞くことが出来たとのことですが、その感想を聞かせてください。

A. 予想よりも「普通の人の経験談」だと感じました。LGBTQ だからというよりも、人として守られるべき権利の話をしていて、「変わっている人たち」という偏見がいかに誤っていたかを実感しました。

SNS では過激な意見ばかりが目につきますが、実際の話は全然違っていて、思い込みで批判するのは違うと感じました。

<堀井研修員が感じた課題>
　日本では性別適合手術などが難しい現状もあり、身体と心の性が一致しない人たちが安心して暮らせる環境を整えていくこと

Q：その話の中で、当事者と家族との関係についての話もあったとのことですが、印象に残ったことはありますか？

A. カミングアウトをしたときに、親から虐待を受けてしまうケースがあるという話があり、「うちの子がそうだったら受け入れられない」と言う親もいると話していたことが印象に残っています。一番身近な家族が受け止めないといけないのに、それが出来ないのはとても辛いことだと思いました。

Q：ほかにも、印象に残っている話題はありますか？

A.「デート DV」や「性教育」に関する内容です。例えば「参画ネットなら」という団体は、学校でデート DV や性教育について講演を行っているという話や「包括的性教育」という考え方が紹介されました。子どもだけでなく、大人も基本的な用語や知識を理解していないと、相談を受けても正しく対応出来ないという話が印象的でした。「日本は性教育後進

国なのに、性的産業は先進国だ」という指摘もあり、本当にその通りだと思いました。

Q：性教育の重要性について、どの様に感じましたか？

A. 性教育の重要性を強く再認識しました。例えばデート DV などは、大人ですら実態を十分に理解していない場合があり、当事者である子どもも「恋愛はプライベートなこと」と捉えて相談を躊躇しがちです。

<堀井研修員が描く将来の展望>

学校での教育はもちろんですが、子ども・大人を問わず、悩みが生じた際にためらいなく相談できる「第三の場所」や環境づくりが不可欠だと感じました。

ブレイクタイム

堀井研修員はどう感じた？

SNS 上で得られる情報と、日本女性会議に参加して得られる情報の違い

SNS は情報が偏ることがありますが、現地で直接当事者の話を聞くと考え方が変わることが多いです。LGBTQ 当事者の話を聞いて、自分の中の見方が変わった点もありました。やはり「生の声」に触れられるイベントがもっとオープンに開催されるといいなと思います。

【ほかにも色々】

交流会 全大会

初めての立食形式で、とても緊張しました。でも、社会人の方から声を掛けて頂き、全国の男女共同参画センターが来年から「男女共同参画機構」にまとめられるという情報を得られて、日本女性会議の規模の大きさを改めて実感しました。

内閣府からの報告もありましたが、私は日本女性会議のことを今まで知りませんでした。参加者の方とも「もっとテレビなどで取り上げられたらいいのにね」と話していました。

市ホームページには、さんかくまつりでの発表の際に堀井さんが使用したパワーポイント資料も掲載しています。
より詳しい全大会の内容もあるので、ぜひご覧ください！

かしはら未来会議

中高生が自分たちで調査や資料作成、プレゼンを行っていて、レベルの高さに驚きました。交通の便や街灯など、地元の課題を踏まえた提案が多く、「市民プールを作ろう」といった思い切ったアイデアもありました。中高生の意見が行政や企業に直接届く場はとても意義があると思いますし、こうした場が北海道でも増えるといいなと感じました。

【今後について】

Q：今回の経験を踏まえて、２つお聞きします。今後どの様に行動していきたいと考えていますか？

A. 性教育は本当に大切だと感じました。親世代が理解していないというところも盲点で、世代にかかわらず皆が使える性教育の基盤が必要だと思います。

将来的には、自分の専門分野と組み合わせて、性教育に関するサイトやチャットボットのようなツールを作れたらいいなと考えていたり、AI を使った、日記の内容から「自分が何に喜びや悲しみを感じやすいか」を分析する自己理解支援のシステムなども考案中です。こうした便利な IT ツールを使うことで自分自身を理解するきっかけを提供することが実現したいと思います。卒論のテーマとしても挑戦できたらと思っています。

Q：今後江別市に取り入れて欲しいところはありますか？
おおまかに２つあります。

１.性教育について

各種活動団体の力をお借りしながら学校での講演や対話の場を設けることで多様な価値観や生き方への理解が深まり、誰もが安心して過ごせる地域づくりにつながるのではないかと思います。

＜そう感じたきっかけ＞

日本女性会議では LGBTQ の当事者の方のお話を伺い、当事者の存在の身近さを強く意識するきっかけとなりました。こうした気づきは学生の時期にこそ必要だと感じています。

２.まちづくりについて～かしはら未来会議を踏まえて～

学生や市民が気軽に参加できる市が主催の小規模なワークショップがあると良いと感じています。単なる意見交換にとどまらず、自分の住むまちに対する希望や提案を自由に出せる場として設けることで、地域への関心が高まり、自分の住むまちについて主体的に考えるきっかけにつながると思います。既存の取り組みがある場合には、開催場所を学校などにして、幅広い世代がより参加しやすい形に工夫することも効果的だと考えています。

【番外編：身近な違和感】

＜干野サポーター＞

大学生活を送るうえで違和感を覚えるのはどの様な時ですか？

＜堀井研修員＞

「女性だから」というよりは、多様性の話題のときに感じることが多いです。例えば LGBTQ の話が出たときに、かなり差別的な発言をする知人がいます。「それは頭の障害だ」と言う言葉を聞いても、医療的な知識があるわけではないし、感情論だけで返すのも難しくて、とっさに言い返せなかったのが悔しかったです。だから、「女性会議でこういう話を聞いてきた」と言えるような知識の引き出しが欲しかった、というのも参加の大きな理由のひとつです。

＜干野サポーター＞

つまり、感覚的には違うと思っても、根拠を持って反論出来なかったのですね。

＜堀井研修員＞

そうです。「それは言っちゃダメな内容だ」という曖昧な反論しか出来ず、もっとちゃんと説明したいと思いました。

男性が多い環境なので、女性だからと優しくされたり、力仕事を免除してくれたりする場面があります。もちろん有り難いのですが、「力仕事以外でも女性として貢献出来ていることがあるのではないか」と感じることもありました。そういう面でも女性会議で得られる知見に期待していました。

市ホームページでは、堀井さんが出演した「Ｂｒｉｃｋ Ｒａｄｉｏ」やここでは紹介しきれなかった全大会の様子等が掲載された資料も掲載しています。ぜひご覧ください。

＜市ホームページ▼＞